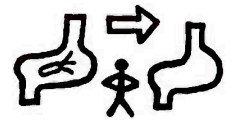


胃がんの原因のほとんどがピロリ菌の感染です。世界保健機関（WHO）もピロリ菌をたばこやアスベストと並んで、「確実な発がん因子」と認定しています。ピロリ菌に感染している人が、塩分の多い食事や喫煙を続けると、胃がんのリスクが高くなるのです。

内視鏡で胃の粘膜を観察すると、ピロリ菌に感染しているかいないかはすぐに分かります。感染のない胃の表面はなめらかでみずみずしい光沢があります。一方、感染があると全体的に赤くなり、みずみずしさがなくなり、さらに長く感染していると、胃粘膜はやせ細り、ペラペラになってしまいます。この状態

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

菌を殺す「除菌」ができるようになっていきます。除菌によって、胃がんの発症リスクを減らせる可能性があります。たとえば、早期胃がんの治療後にピロリ菌を除菌した患者さんは、除菌をしなかった患者さんと比べ、3年以内に新しい胃がんが発生した人が約3分の1だったと報告されています。

ピロリ菌除菌後も油断禁物

を「萎縮性胃炎」といい、胃がんがでやすくなります。実際、胃潰瘍や胃炎などの患者さんを対象とした調査でも、10年間で胃がんになった人の割合は、ピロリ菌に感染

している人では約3%でした。一方、感染がない人では胃がんを発症した人は一人もいませんでした。最近になって、抗生物質などを1週間飲むことでピロリ

WHOもピロリ菌除菌に胃がん予防効果があることを認めています。日本ヘリコバクター学会も、ピロリ菌に感染している全員に除菌を推奨しています。

ここで注意してほしいのは、除菌で胃がんのリスクは減るとしても、長年の感染によるダメージが完全に消えるわけではないということです。油断は禁物です。また、除菌の前からあった微小な胃がんが、徐々に進行してくるケースも少なくありません。「除菌すれば胃がんにはならない」といった誤解もあるようです。除菌に成功すると、定期的な検査をやめてしまう人も少なくありません。たとえ除菌しても、もともと感染がない人に比べれば、胃がんのリスクは高いといえます。除菌後も定期的な検査をけっして怠ってはなりません。

（東京大学病院准教授）